

よごうしょう がっこう 四郷小 学校だより

第 25 号
令和3年 2月 5日

2月4日・第146回創立記念日にあたって

今年度はコロナ禍で全校集会ができないため、月に1回程度、放送による校長講話を行っています。昨日の朝は、以下のことをお話しました(本当は子どもたちの顔を見て話したいのですが…)。まずは「3学期のめあて」の達成めざしてがんばってほしいですね。

- 4年生・二分の一人成人式の様子(10年間分の成長と感謝、そして10年後の夢)。
- コロナ感染予防のため、マスクを必ず着用等。コロナに負けない体力をつけよう(縄跳び等)。
- 6年生のために心のこもった「6年生を送る会」に向けての準備や練習をがんばろう。
- 学校創設者・5世伊藤小左衛門さんと、地域の発展につくした10世伊藤傳七さんの功績等。
- 三泗小中学校美術展・書写展の入賞者紹介

今回の「学校だより」では、昨年度の卒業式「学校長お祝いの言葉」の中で卒業生に話した伊藤小左衛門さんの家族の絆と功績を中心に紹介します(今の6年生の皆さんは、1年前のコロナ禍のため、在校生代表として卒業式に参列できませんでしたので、ぜひ読んでくださいね)。

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

皆さんは自慢の6年生でした。数々の行事の中での大活躍。そして最上級生として下級生のお手本となり、立派に学校を支えてくれました。(中略) そんな皆さんに、145(今年は146)年前の2月4日にこの四郷小学校(旧笹川学校)をついた「5世伊藤小左衛門さん」のお話をします。令和元年度は、小左衛門さんの生誕200年という記念すべき年にあたります。小左衛門さんは、大正2年の修身、今でいう道徳科の教科書の中の2つのお話「兄弟」と「進取の気象」に登場します。



一つ目の「兄弟」のお話。

室山出身の小左衛門さんは、家業の味噌や醤油作りをさらに工夫・改良し、よい品質と安い値段で販売しましたので評判になりました。しかし、37歳の時、大地震が発生し、味噌・醤油倉庫が壊れてしまいました。さらに長雨のため、味噌・醤油はすべて腐ってしまい、伊藤家は大ピンチに陥ります。世間の人々は、「いくら室山の味噌屋でも、元の通りになるのは難しいだろう。」と噂し合いました。そんな時、小左衛門さんは、3人の弟を集めて、「これから先、兄弟で心をひとつにして頑張り、3年のうちに伊藤家を元のように戻したいと思うがどうか。」と相談しますと、3人は大賛成します。そして4人が他人の力には頼らず日夜働いてそれぞれの役割を果たし、やがて前よりも立派な倉庫を建て、味噌の仕込み量をはるかに増やし、やがて伊藤家の建て直しに成功します。兄弟4人が「ワンチーム(2019年の流行語大賞)」となったのです。

二つ目の「進取の気象」のお話。

小左衛門さんは常に、「日本国内を相手にいくら商売をしても、それで国が豊かになるわけでもない。これからは外国を相手に商売をして、日本を豊かにしたいものだ。」と考えていました。明治時代の初め、日本は貧しい国でした。小左衛門さんは、日々勉強を怠りませんでしたので、外国では、お茶や生糸が喜ばれることを知っていました。そして四郷で製茶業を始めました。

まず山を切り開いて、お茶の苗を植え、四郷の土地の人々にもお茶栽培を勧めました。しかし、誰一人「うまくいくはずはない。」と、耳を傾ける人はいなかったそうです。めげずにコツコツと努力を重ね、莫大な利益をあげると、「我も我も」と周囲の人もお茶畑を経営するようになったので、この頃、四郷地区は多に開発が進みました。

さらに小左衛門さんは、お茶販売の利益を元手に、今度は製糸業に取り組みます。まず桑畑を開いて蚕を飼い、生糸の生産に取り組みますが、なかなかよい生糸はできません。繰り返し失敗や損を重ねます。しかし、修身の教科書にはこのように書いてあります。「一度や二度の失敗でひるむような小左衛門ではありません。」と…。苦労の末、三重県で最初の蒸気機関が製作・設置され作業の効率化が進み、さまざまな研究調査と苦心を重ね、十数年もの年月をかけて、ようやく外国の商人が褒めるような良い生糸を作ることに成功し、自信を持って外国へ輸出しました。これが2つ目の「進取の気象」の話。進取とは、いつまでも考えすぎや用心しすぎることなく、進んで思い切って事に当たる、挑戦し続けることを言います。また、小さな成功に満足しないで、常に一步でも前へ前へと進歩・向上を図ることを言います。この遺志は、6世、7世の小左衛門さんへと引き継がれることとなります。



いかがでしたか。今日は、小左衛門さんの人生における2つの大きなピンチを紹介しました。そして、どうすれば解決できるか、小左衛門さんは私たちに生きるヒントをくれました。

皆さんの将来、楽しいことばかりが待ってはいないでしょう。学校や家庭で、将来は社会で様々な困難やピンチが皆さんの前に立ちふさがるでしょう。そんな時、今日の小左衛門さんの話を思い出し、学校で学んだ知識や経験をもとに家族・仲間とともに知恵を働かせながら、最後は自分の力で判断、そして解決してってください。そのためにも中学校でしっかり勉強に励み、努力を継続してください。素晴らしい皆さんのことですから、きっと解決できると信じています。(中略)小左衛門さんの銅像が、卒業した後もずっと皆さんを見守ってくれていますよ。

10世伊藤傳七さんは、2月からスタートするNHK大河ドラマ「晴天を衝(つ)け」の主人公・実業家の渋沢栄一と工場経営について交流があり、援助を受け「三重紡績会社(のちの東洋紡績)」を設立し工場や四郷の村づくりを行いました。会社は、東洋一の紡績工場と言われ、室山町の「東洋橋」はその名残でしょうか。なお、お二人とも四日市市教育委員会発行の3・4年生社会科副読本『のびゆく四日市』『地域のはってんにつくした人々』に記載されています。

さて自分は今、3月19日(金)の卒業式ではどんなお話をしようかな…と6年生との別れを寂しく思いつつ、中学校に旅立つ75名に贈る「お祝いの言葉」を思案中です。コロナ禍のため、再び5年生やご来賓の方々は式に参列できませんが、その分、全職員(十どころかで5年生も)で心のこもった卒業式にします。ですから6年生の皆さん、残り少ない小学校生活を健康で安全に過ごし、最後の授業となる卒業式当日は、全員が元気に登校できるように心がけましょう。そして、下級生によいお手本を示してほしいと思います。